大小島真木

JOSHIBI no.195

大小島真木（おおこじま・まき）

美術家。2011年女子美術大学大学院修士課程修了。異なるものたちの環世界、その「あいだ」に立ち、絡まり合う生と死の諸相を描くことを追求している。日本各地をはじめ、インド、メキシコ、ポーランド、中国、フランス、海洋調査船タラ号での海上などで滞在制作。2014年にVOCA奨励賞を受賞。主な展覧会に、個展「L'oeil de la Baleine/ 鯨の目」（2019年、フランス・パリ水族館）、「瀬戸内国際芸術祭ー粟島」（2019年）、「コロナ禍とアマビエ」（2022年、角川武蔵野ミュージアム）。

私にとって「描く」は思考のツールです。

現代アーティストとして絵画、映像、陶芸などを手がける大小島真木さん。生と死の絡まり合いを映したアート作品の源流は、女子美時代にあると明かします。

最初に絵を描いたのは2歳のとき。紙の上でクレヨンが擦れる感触が面白い上に、描いたものを褒められるのが嬉しいから、無心で描き続けたものです。続けていれば、自ずと技術も培われていくもので、小学校では絵画コンクールで入賞した思い出もあります。女子美の付属高校に進学したのは「もっと描くことを生活の中心にしたいな」という思いからでした。美術が好きで集まってきた同級生たちが制作に注ぐエネルギーは、中学までのものとは桁違いで、文化祭のときにはダンボールを用いて、教室が一変するような作品をみんなで作ったことも。「中途半端なものは作りたくない」。その一心で制作に励んだものです。当時はまだ明確な夢はありませんでしたが、高校を卒業する頃に母からもらった「好きなことがあるなら、パンの耳をかじってでもやり抜きなさい」という言葉に背中を押されて、女子美術大学に進みました。

じっくりと時間をかけて重厚感のある絵を描きたい。そう考えて、大学では油絵を専攻しました。高校までは目に見える形状をダイレクトに表現することが多かったのですが、大学からは描くという行為の意義を自問するようになります。美術史、西洋・東洋哲学、人体解剖学などの授業も履修し、図書館ではさまざまな本や図鑑を読みふけりました。一方で、私の創作活動に大きな影響を与えたのは、脳梗塞で倒れて以来20年ほどの寝たきりの祖母を、家族が自宅介護するそばで見続けてきたことでした。大学2年次に祖母は他界しましたが、物心つく前からその姿を見続けてきた私にとって、祖母の生と死を隔てる境界はとても曖昧に感じられたのです。どこまでが生で、どこからが死なのか。精神の死と、肉体の死は別物なのか。やがて、そうした答えのない問いに向き合うプロセスをドローイングの線として残すことも増えてきました。「描くこと」は私にとって思考のツールでもあったのです。徐々に専攻していた油絵という表現手段のほかにも自分を開くようになっていきました。油絵の場合、作品の完成までに時間がかかり過ぎてしまい、絶え間なく変化する思考を動的に表現する上であまり適当ではなかったからです。大学4年次には卒業制作の

Photo 山本康平　Text 株式会社フリッジ

油絵に取り組んでいましたが、実際のところ卒業制作として提出したのは「ハートシリーズ」という心臓をモチーフとした100枚のドローイングでした。制作中の絵を見つめる時間が長くなればなるほど、思考は移り変わっていくのですが、その変化に合わせて筆を動かす上では、ドローイングこそが最適な技法だと感じられたのです。卒制の担当教員からも「あなたには油絵よりもドローイングの方が向いている」と断言されたほどです。大学院に進むことに決めたのも、もっとドローイングを探求したかったからでした。

大学院時代を語る上で欠くことができない体験といえば、インドの農村で壁画を制作する「ウォールアートプロジェクト」に、ボランティア参加したこと。現地では、先住民であるワルリ族とともに過ごしました。彼らには、牛糞で作った土壁に、新米をすり潰した顔料で絵を描く習慣があります。電気や水道などのインフラが日本のように整っていないのは当たり前で、停電が起きればランプを手に誰からともなく語らいが始まる。日本では蛇口をひねれば水が出て、電車は定刻に来ますが、その常識はワルリ族には通用しません。違いに驚いた一方で、異文化の視点から「改めて日本を知る」という実感を得ました。多様なまなざしを作品に取り入れることが、作り手としていかに大切かを学んだのもこのときです。

もうひとつ、私の作品のベースになっているのは、生と死の絡まり合いです。インドから帰国してまもなく、東日本大震災が日本を襲います。東北でのボランティア活動で泥出しをしていると、瓦礫の間から新芽が覗いていました。人々の生活が混迷を極めている土地で、その環境を懐に新たな命が育つ。とても印象的な光景でした。ここ数年は、「土」という素材にも興味を持ち、陶芸作品を手がけるようにもなります。土は死骸を分解する一方で、生き物を育む養分にもなる。動植物の生と死を循環させるメディウムのような素材です。陶芸に向き合っていると、この世界の成り立ちに思いを馳せずにはいられません。

多角的な視点と、生と死の絡まり合い。コロナ禍には、女子美時代から大事にしてきたこれらテーマをいっそう強く意識するようになります。2022年には、角川武蔵野ミュージアムの「コロナ禍とアマビエ 6人の現代アーティストが『今』を考え

る」に出展する機会を得ます。きっかけは、ディレクターの神野真吾さんから「パンデミックを受けて感じたことから作品を作ってほしい」と声をかけていただいたこと。コロナを機に私たちは、人間、動物、ウイルスなど、あらゆるものが絡まりあって存在しているという現実に改めて向き合わされました。私がふたつの作品で表現したのもこのことです。ロックダウンを実施しても、マスクで口を覆っても、ウイルスの侵入を完全には防げない。国境を塞いでも、移動を制限しても、私たちは他者とのコミュニケーションを求めずにはいられない。身体も、社会も、生命も「完全に閉ざすこと」なんてできません。でも、そうした綻びがあるからこそ、私たちは繋がることができるし、その繋がりが私たちを生かしています。そんな思いを込めて、さまざまな生命体が絡まり合う様子を絵画や陶芸で表したインスタレーションが「綻びの螺旋」です。もうひとつは「Re-forming〈I〉」という映像作品で、AI の GAN（Generative Adversarial Network）という技術を用いました。人間の顔とウイルス、ミミズと虎、自分のドローイングと草木など、まったく異なるふたつの画像を合成し、キマイラ（混合生物）を生成。絡まり合う生命の輪郭を表現しました。自分は時代や環境から影響を受けながら、常に変化し続けている。制作を通してそのことを考え続けました。

現在はアーティストとして活動するかたわらで、女子美の非常勤講師もしています。私が大きく関わっている授業の一つは、動植物をテーマにしたものです。講義の最初に、学生たちには問いを投げかけます。人間は動物ですか。動植物から見て、私たちはどのように映っていますか。私たちは動植物を食べて生きていますが、仮に家族や友人が動植物に食べられたらどう感じますか。学生たちには、これらの質問から得た感触をまず書きとめてもらいます。答えがひとつではない問いについて言葉にしたり、絵を描きながら考えてもらうのです。自分とは異なる生き物の目で世界を見つめ直してほしい。そんな意図があります。「まなざしひとつで世界の姿が変わる」ことを体感できる授業がここでの理想です。こうした問答を制作することに、芸術の大切な役目のひとつがあるのではないでしょうか。

私自身も、もっと多様なまなざしを取り入れていきたいと思います。自分の視点とは、カメラのレンズのようなもの。レンズを変えれば、見える世界も自ずと変わります。レンズを増やすために、さまざまな場所で制作してみたい。扱う素材や技法が変わってもいいですし、もしかしたら私にとっての「作る」が造形することだけではなくなるかもしれません。そうやって、今後もさまざまな変化を楽しみながら表現し続けていけたらと思っています。

《 綻びの螺旋　Perforated Spiral 》

《 Re-forming《I》》

Installation view ©2021 Maki Ohkojima Courtesy of Kadokawa Culture Museum Photo by Osamu Nakamura

Information▷ 本記事で紹介した大型作品などが出展されています

《地つづきの輪郭》大小島真木 高嶋英男 伏木庸平 増子博子

会期：2022年4月29日（金・祝）－ 8月28日（日）
開館時間：10:00－18:00（入館は閉館の30分前まで）
休館日：木曜日（5月5日は開館／ 8月無休）
セゾン現代美術館　https://smma.or.jp/
〒389-0111長野県北佐久郡軽井沢町長倉芹ケ沢2140

MESSAGE 01

新入生に向けて

学校法人女子美術大学
理事長　福下 雄二

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお慶びと歓迎を申し上げます。

本学は、3年後の2025年には創立125周年を迎える、私立の美術大学としては最も古い歴史と伝統を誇る大学でありますが、皆様とともに、これからの女子美術大学の歴史と伝統を一層輝かしいものに築き上げ、皆様が本学で学ばれることを誇りに思っていただける大学にしていきたいと思います。

これからの学生生活では、人と人との出会いやご縁を大切に、良き友人に恵まれ、良き先生に巡り会えるよう努力していただき、充実した学生生活を送って下さい。

コロナ禍の中で、不自由、ご不便をおかけすることになると思いますが、皆様や先生方そして大学が力を合わせてこの困難を乗り超え、新しい女子美術大学を創り上げていくことができますよう、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

女子美術大学
女子美術大学短期大学部
学長　小倉 文子

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。1900年に創立した女子美は〝女性の自立〟を建学の精神として今年で122年を迎えます。賢母良妻の考えが主流だった当時の女子教育の中にあって革新的な学校の登場でした。この精神は現在まで受け継がれ、多くのアーティストやデザイナーを輩出してきました。また、起業する卒業生も多く、職種も多岐にわたります。考える力、生きる力を身に付け活躍の場を広げた結果といえます。

大学生活では学科専攻領域を越えて自由に参加できる産官学との連携プロジェクトや異分野と協働で行うプロジェクトが多数あります。また、海外で行うインターンシップや留学制度なども充実しています。行動することでたくさんのモノと出会い、たくさんの人とつながります。

正課授業で習得する知識や技術に加え、正課外のプロジェクトに参加することで出会うモノやコトを最大限活用し、社会とつながり、学科を越えた仲間たちとともに体験を通して成果を上げられることを期待しています。

短期大学部部長
佐藤 真澄

芸術学部長
清水 美三子

大学院美術研究科長
川口 吾妻

副学長
後藤 浩介

副学長
松本 博子

女子美の感染症対策と取り組み（続報）

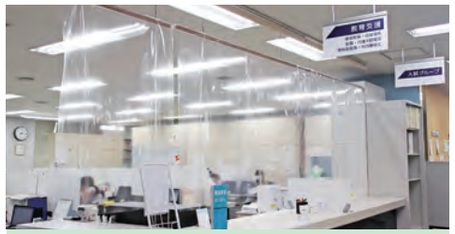
本学では引き続き、学生・来校者・教職員をはじめ、すべての皆様の安全を最優先に考え、新型コロナウイルス感染症対策に取り組んでいます。

自然換気の対応として、現時点で網戸（杉並387カ所、相模原246カ所）、サーキュレーター（杉並94台、相模原50台）設置しています

校舎内各所にアルコール消毒液を設置し手指消毒の徹底をしています

換気が十分に行われているかどうかを確認するための方法として、二酸化炭素濃度測定器を設置しました。また、一部の施設に空気除菌装置を設置しました

マスク着用、手指消毒の注意喚起などポスター掲示、呼びかけによる周知を徹底しています



実技室、研究室、事務室窓口各所にアクリル板、飛沫感染防止カーテンを設置しています

職員に感染対策アドバイザー検定を取得させ、現場で働くスタッフへの感染対策教育を推進しています

学生食堂、学生ロビー等、各所にソーシャルディスタンスサインを設置しています

講義室、学生食堂等の換気設備の拡充を実施しています

令和3年度から随時各施設に空気清浄機を設置しています

新任教員からみなさんへ

首藤 圭介
Keisuke Shuto

芸術学部
アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
特任准教授

1978年大分県生まれ。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修了。アートを軸にメディアアートや空間デザイン、地域社会マネジメントなど横断的、学際的な制作・研究を行っている。2013アジアデジタルアート大賞 エンターテインメント(産業応用)部門 大賞／経済産業大臣賞など

社会が大きく変容している今、私たちができる事は何でしょうか？一見、何気ない日常が延々と続くような錯覚に捉われ、日々の出来事を受け流してしまいがちですが、それらの日常の多くに私たちが深く考え、世界を知るヒントが隠されているように思えます。アートやデザインは、その目を通して世界を知り、また世界を変える事ができる重要なツールです。在学中、ぜひ色々な経験をしてください。アートやデザイン以外にも色々な知識や経験に触れることで、いつしか点であったその積み重ねが線を結び、自分という像を形作ってくることと思います。そしてこの大きく変容していく自分や世界を一緒に形作っていきましょう。

水野 健一郎
Kenichiro Mizuno

短期大学部 造形学科
デザインコース
特任准教授

1967年岐阜県生まれ。鳥取大学工学部社会開発システム工学科中退。セツ・モードセミナー卒業。女子美術大学短期大学部造形学科デザインコース非常勤講師を経て現職。東北芸術工科大学非常勤講師。美学校講師。京都芸術大学特別講師。映像チーム「超常現象」、美術ユニット「最高記念室」としても活動。「得体」「擬似マウンテン」キュレーション。2019年「マイファイ絵画実験室」開講。

美術は難しいですか？絵が上手く描けることと美術がわかることは違います。例えば、いくらデッサンを練習してもピカソの絵を理解できるようにはなれません。しかし、いろいろな絵を見て考えていると、ある日突然全ての謎が解けるように見え方が変わります。ピカソだけでなく、ゴッホもシャガールも具体もニューペインティングも全部輝いて見えるようになります。自分自身の意識と感覚と思考が変化したのです。変わるきっかけはあらゆるところに潜んでます。しかしそれはもしかしたら美術と無関係な姿をしていたりします。好きなものだけではなく、退屈なものや嫌悪感を覚えるものにも目を向けるように心がけましょう。まずは、雑草の名前を覚えるところから始めてみましょうか。

退職された先生方

芸術学部	美術学科	洋画専攻	特任教授	白井美穂
芸術学部	美術学科	芸術文化専攻／共通専門	教授	稲木吉一
芸術学部	デザイン・工芸学科	ヴィジュアルデザイン専攻	教授	澁谷克彦
芸術学部	デザイン・工芸学科	工芸専攻	教授	渡邊三奈子
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	特任准教授	佐藤暁子
芸術学部		共通専門	特任助教A	佐藤紀子
短期大学部	造形学科	デザインコース	教授	小林信恵

鴻崎 正武
Masatake Kozaki

芸術学部 美術学科
洋画専攻
特任准教授

1972年福島県生まれ。1999年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、2005年同大学大学院美術研究科博士課程修了、美術博士。東北芸術工科大学芸術学部美術科洋画コース准教授などを経て現在に至る。個展、絵画、立体、コミッションアート、アーティスト・コレクティブなど国内外のギャラリーや美術館、芸術祭で発表している。2004年 第13回青木繁記念大賞公募展 大賞、2020年MUGEN ART FRONT GALLERY（代官山、東京）

大学生活をめいっぱい楽しみながら、その日その日を大切に、課題ひとつずつを兎に角がむしゃらに挑んでみてください。真剣に取り組んだものごとは、創造の種になり芽を出し根っこを張って、しっかりとした芸術思考の支柱に成長します。そして、真摯に挑戦した経験や失敗から新たな発見に気づき、そこから貴方らしい独自の表現が生み出されるのです。芸術には古今東西の様々なものを包括し、豊かな人間の価値観を育んできた歴史があります。これからも世界中の様々な分野において、描く力の可能性は無限大に広がっていくことでしょう。貴方自身のリアリティを大切にし、今の時代を観察しながら様々な知見を深めて下さい。そして芸術を社会に実践的に活かし、素敵な未来を切り拓いていきましょう。

中嶋 貴久
Takahisa Nakajima

芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
特任教授

1998年東京藝術大学デザイン科大学院修士課程修了。同年電通入社。アートディレクターとして多くの広告制作やブランディングに携わる。2013年、電通から独立し nakajima takahisa design inc. 設立。2018年よりsora代表。

デザインやアートディレクションは美術大学で学ばなくてもできる仕事だと思います。テクノロジーが発達した現在では尚更そういったことが言えると思います。しかし、美術や造形を学んだ我々がデザインやアートディレクションをする意味や強みがきっとあるはずです。自分にとって、興味があることは何か？好きなことは何か？ 強みはどこにあるのか？ 大学4年間の中で、制作や体験を通してそれらのことを見つけて欲しいと思います。自分にしか考えつかないこと、自分にしか作れない表現がきっとあるはずです。それらを見つけられれば、意味のある4年間になると思います。

工藤 聖美
Kiyomi Kudo

芸術学部 デザイン・工芸学科
工芸専攻
特任教授

1964年神奈川県生まれ。1987年女子美術大学芸術学部産業デザイン科工芸専攻卒業。1994年より女子美術大学非常勤講師として勤務。繊維素材の多様性と織物組織の組み合わせが作る陰影を用いて、立体感のある布表現を研究、制作する。作品は国画会を中心に発表し、手仕事の可能性を追求した講座、ワークショップを開催している。

最近はWeb上での発表を余儀なくされた展覧会も、ようやくギャラリーや美術館での開催が戻ってきました。実態ある作品は、その会場に足を運んで鑑賞してみませんか。工芸作品の原料には、重さ、温度、匂い、味？ といった視覚だけでは測れない特質を持っています。作者はその素材にまみれながら、アプローチを重ねて作品を完成させていきます。工程にも愛着と美意識を持って挑んでいます。是非、素材のパワーと創り手の情熱を展示空間で浴びてみてください。皆さんが大学で学び始めた、長く地道な制作もここへと繋がります。小さなモバイル画面では発見できないものや、興味の幅を広げる出会いがきっとあります。そんな小さなチャンスを積み重ね、ご自身の制作に反映させながら、"リアリティー "の中に潜む工芸の魅力を、一緒に見つけましょう。

伊藤 治子

Q1 なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか？

生涯にわたる制作課題がようやく見つかったのが、大学時代も半ばを過ぎた頃でした。そこで、もう少し学生を続けたくて、国際的にご活躍されていた工芸科の恩師・伊藤公象先生の影響と、「もの派」に感化されマリオ・メルツなどのアートポヴェラに興味があったことで、イタリア留学を決めました。ミラノ美術学院の彫刻科で学ぶうち、「ご飯が美味しいこと」「家族を大切にする文化」といったイタリア人の気質やイタリア文化が肌に合い、居心地が良かったのでそのまま居着いてしまいました。

Q2 女子美時代は、どんな学生でしたか？

作ることは好きだけど、何が作りたいのかわからない。大学時代半ばまで、自分自身の方向性がつかめない時期が続きました。きっと、存在感が薄い学生だったと思います。

Q3 女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

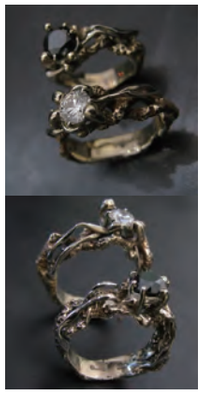
一つ目は、茨城県・大洗港のベンチ制作です。地元のセメント加工会社の協力のもと、陶芸コースの学生が、一人一つずつ陶を使ったデザインでベンチを制作しました。個々のデザインの差異でかかる手間が大きく異なることを目の当たりにし、また、学生とは比べものにならないほど職人さんたちの手際が良く、頭の中の完成イメージが見事なまでにクリアであることに驚きました。
もう一つは、彫金の丸山聡先生の「日常品は芸術になりにくい」という言葉。イタリアに来て、インスタレーション中心だった制作からジュエリーのみに軸足を移行しましたが、その後押しになった言葉です。私にとっては、難しいとわかっているからこその挑戦です。

Q4 美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか？

私が選んだのではなく、女子美に選ばれたのではないかと、そんな運命的なものを感じて（笑）。

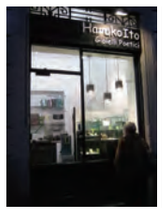
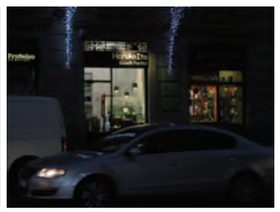
左：プロフィール写真 photo by Sohail Karmani ／ 右：作業台写真 photo by Jacopo Salvi

コレクション「月面」ネックレス
ゴールド、シルバー、ダイヤモンド



コレクション「イエロー＆ブラック」リング
ゴールド、ダイヤモンド

コレクション「WA 輪・和」
ゴールド、オパール

左：ブティック兼工房外観 ／ 右：ブティック兼工房外観とクリスマスイルミネーション

Q5 制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。

人生自体が「制作」だと思っています。想像して、それを形にしていく。頭の中の映像や印象がクリアでないと形にはならない。だからまず、自分の迷いをなくすために十分に自分と対話し準備しています。また、制作していくための最高な環境を常に保つため、心と体を整える日常習慣。たとえば、何もしない時間や散歩時間の確保。穏やか且つ心が踊っている状態が長続きするよう、自分で自分の機嫌をとっています。制作には無限の可能性があります。それに惑わされないように、自由な発想の中に条件を加えていくことも意識しています。

Q6 大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

卒業後も変わりませんが、とにかくさまざまなことを経験すること。何がどこでどう役立つかわかりません。それに、圧倒的に視野が広がります。

Q7 海外で制作・仕事をすることの“楽しさ”を教えてください。

「繊細な個人主義」であるイタリア人に共感し、驚嘆し、それを鏡に自分自身を知ることができます。また、2つの文化を股にかけることで、普遍的な概念が見えやすいとも思っています。他文化圏にいるからこそ、その視点を学び、さらに自国の文化を再認識できる。イタリアに来なければ、いかに自分が日本の文化に無知であるかを、知ることもなかったでしょう。また、日本に生まれたというだけで恩恵を受けることもあります。それは、日本の国の文化が世界的に見て稀な要素が多いからで、憧れや敬意を表してくれる方が多いです。本当にそれは、ありがたいことです。

Q8 やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。

やりたいことは、誰しも現在進行形でやっています。それが将来やりたいと思っていることにつながっていきます。あとはそれを、続けること。「制作し続けること」。それが駄作であり、失敗作だとしても、それを糧に、それを超えるため、思考し次を想像し、形にすること。手段がないと思われることも、その過程で自然と手段は現れる。そのぐらい柔軟な頭でいることです。繰り返しになりますが、人生自体が「制作」だと思っています。想像して、それを形にしていく。自分の人生のクリエイターは自分です。それは本当に楽しい発見です。

Q9 後輩（女子美生）に一言メッセージをお願いします。

直感を信じて、できるだけ多くの経験を。

コレクション「イエロー＆ブラック」
シルバー、シルク

コレクション「月面」ネックレス　ゴールド、シルバー、ダイヤモンド

伊藤治子（いとうはるこ）

ジュエリー作家。
1995年工芸科陶芸コース卒業。伊藤公象先生に師事。卒業後イタリアに渡り1995年9月からミラノ美術学院彫刻科に在籍。2003年卒業。
1999年から2003年まで彫金の学校に通いながら、アンティックジュエリーショップの工房で助手を務める。2005年自らの工房を立ち上げる。
2010年にはお店兼工房 ブティック「Gioielli Poetici」（ポエティック・ジュエリー）をミラノのスフォルツェスコ城とブレラ地区の間にオープン。
「Haruko Ito: Gioielli Poetici」Webサイト
www.haruko.it

企業で働く、そんな未来。

Vol.01

株式会社Cygames

「最高のコンテンツを作る会社」をビジョンとし、ゲームの企画・開発・運営、アニメ製作、漫画事業などを手がける。2021年2月に配信を開始したスマートフォン向けゲームアプリ『ウマ娘 プリティーダービー』が大ヒット中。
https://www.cygames.co.jp

『ウマ娘 プリティーダービー』 ©Cygames, inc.

R.Y.さん

芸術学部 美術学科
洋画専攻 2017年3月卒業
デザイナー部イラストチーム

大学では油絵制作に力を注いでいましたが、卒業後の進路に悩んでいました。そこで、将来の可能性を広げるために、飲食店のアルバイトをしたり、フリーのイラストレーターをしてみたりと、いろいろなことに挑戦することに。その一つが、「企業で絵に関わる仕事をしてみたい」と始めた、サイゲームスでの学生アルバイトでした。ゲームが昔から大好きだったのも理由のひとつです。

チームで作る楽しさを知った学生アルバイトが就職のきっかけ

サイゲームスでのアルバイトは、平日に週2〜3日ほど。大学生活との両立は少し大変でしたが、1〜2年次に多めに単位を取得していたことに助けられました。
アルバイトを始めて最初の1ヶ月は、研修期間として先輩社員の皆さんから絵の描き方や、考え方をみっちり教えてもらいました。特にマーケティングに基づいた制作の考え方は、大学とはまた違った学びがあり刺激を受けました。また、ゲームも絵も大好きな私にとって、〝好き〟が同じ同僚との交流のなかで「チームで作る楽しさ」を教えてもらったことは、本番の就職活動でもサイゲームスを志望する決め手になりました。

コミュニケーションに長けたイラストレーターに

イラストレーターとして入社して5年目。現在は線画を主に、ラフ、着彩、キャラクターデザイン、一枚絵まで幅広く関わっています。学生時代に描いていた油絵とは全然違う世界ですが、油絵制作で培った忍耐強さや精神力は、今の仕事にも大いに生かされています。また、がんばって積み上げたものでも、何か引っかかりがあれば思い切ってリセットするというスタイルは、油絵をやっていたからこそだと思いますし、より良い作品作りの土台になっています。
日々の仕事において私が大切にしているのは、他者とのコミュニケーションです。ゲーム制作はチーム作業。モノづくりが好きな人たちがたくさん集まり、一人ひとりがクリエイターとして、アイデアや知識を出し合いひとつのものを作り出していきます。その過程はとても刺激的ですし、自身の価値観や知識のアップデート、成長につながっています。

T.C.さん

芸術学部 美術学科
洋画専攻 2018年3月卒業
デザイナー部イラストチーム

洋画専攻で油絵を学ぶ傍ら、プライベートではひたすらイラストを練習していました。小学生の時にハマッたあるゲームをきっかけに、ずっと描き続けてきたイラストは、私の創作の原点でもあります。そんな「イラストを活かせる仕事に就きたい」という思いと、大学の授業や講演で触れ興味を持ったのが、ゲーム業界でした。

常にユーザー目線で描く

サイゲームスの魅力は、他社よりもイラストレーターの在籍が多く、純粋にイラストレーターとして働けること。さらに、3年次の夏休みに経験した2週間のインターンで、普段の業務と同じように工程を積んで制作をし、ゲームのイラストレーターの仕事がどんなものかを肌で知れたことで、心が決まりました。
『ウマ娘』『グランブルーファンタジー』など、さまざまな人気タイトルがありますが、私はそのなかで、ストーリーのスチルやカード、キービジュアルなどのイラストの原画を担当しています。すでに完成しているキャラクターデザインをもとに、ストーリー中のシーンに合わせて描いていくケースが多いですが、いつも心がけているのはユーザー目線です。ユーザーの方が見たいもの、キャラクターの魅力をしっかり届け、ゲームとキャラクターを好きになってもらえるように描く。だからこそ、SNSやイベントなどでユーザーの方が喜んでくださっているのを見るのが、最も喜びを感じる瞬間です。

続けることも才能の一つ

周りにいるのは、業界トップクラスのイラストレーターです。その制作工程を間近で見られる環境は、私にとって大きな魅力で、学びの宝庫。毎日身が引き締まる思いで仕事をしています。ただ、よくも悪くも明確に結果が見えてしまう世界でもあるので、悩んだり落ち込んだりすることも時にはあります。そんな時に支えになってくれるのが、大学時代に恩師に言われた「続けることも才能の一つ」という言葉。これだけ続けられているんだから大丈夫だって、前へ進む力になっています。今のご自身の積み重ねは、就職してもずっと心の支えになってくれます。恐れずに挑戦してください。

採用担当者の声

人事部　吉田知世さん

Q1. サイゲームスが求める人材は？

デザイナー職としては、デッサン力などの基礎力がどんな業務でも土台になるので、求めたい要素の一つではあります。また、みんなで意見を交わし制作をしていくことが好きな方がサイゲームスでは活躍しています。「話し下手だから…」なんて、心配することはありません。大事なのは、饒舌に話ができることではなく、相手が言っていることを理解し、求められている回答を出せること。ぜひ学生時代にたくさんの経験をしていただき、さまざまな活動のなかで、知識やアイデアの種、成し遂げたことの自信を身につけ、本質的なコミュニケーション力も鍛える機会にしていただきたいです。

Q2. 吉田さんが感じる女子美生の強み、魅力は？

女子美出身の今回の2名には、ユーザー視点に立って制作に取り組む姿が共通していると感じます。企業で働くうえでは、ひとりの表現者として自分が表現したいものだけではなく、手に取るユーザーの皆さんにとって魅力的なコンテンツを、チームで作り上げていく必要があります。仕事の基本がチームプレイだからこそ、人とのつながりに魅力を感じる方には向いている職場だと思いますし、チームで楽しみながら仕事をする、ということは会社としても大切にしています。

Text 株式会社TURBAN　Photo 渡辺一城

NEWS & TOPICS

中央：大柳久栄さん、左：福下理事長、右：小倉学長

01 | 2021年度女子美栄誉賞

第9回女子美栄誉賞に大柳久栄さんが選ばれました。本学において教鞭を取られていた一方で、日本の料紙研究者として修復技術・和紙についての研究成果を国内外において発表し、講演・執筆を通じて和紙の伝承にも幅広く活躍しています。また、1977(昭和52)年から河鍋暁斎の研究をされ、娘であり女流画家の暁翠が本学の草創期に教鞭を取っていたことを証明し、本学の創立100周年記念「河鍋暁斎・暁翠展」においてその事実を広く紹介しました。

PLAY! MUSEUMにて開催された『柚木沙弥郎 life・LIFE』展の様子 ©木寺紀雄

02 | 本学名誉教授・元学長の柚木沙弥郎先生が「2021毎日デザイン賞」受賞

本学名誉教授であり、元学長である柚木沙弥郎先生が「いつも新しくて嬉しいカタチ」で「2021毎日デザイン賞」を受賞しました。毎日デザイン賞とは毎日新聞社が主催し、あらゆるデザイン活動で優れた作品を制作・発表し、デザイン界に大きく寄与した個人・団体などを顕彰する賞です。1955年に毎日産業デザイン賞として創設され、今回で67回目となります。柚木先生は布だけではなく、版画やイラスト、本の装丁や人形の制作など幅広いジャンルに取り組み、国際的にも評価されてきました。デジタルや量産では生まれない、染色による独特の模様と色彩の世界に、作品を観賞した人々はどこか「新しさ」を覚えます。伝統に裏打ちされた確かな技術と自由な発想で、現在99歳である今も毎日、精力的に創作活動を行っていることも評価され、今回の受賞に至りました。また、2022年9月17日～10月17日まで女子美アートミュージアムにて「柚木沙弥郎の100年ー創造の軌跡」展を開催予定です。

※展覧会の詳細や最新情報は随時、女子美アートミュージアムWEBサイトにて掲載いたします。

〈杉並キャンパス〉6号館1階女性用トイレ

〈相模原キャンパス〉1号館1階女性用トイレ

学内周知用ポスター（制作：短期大学部 佐藤先生、影山先生）

03 | 「OiTr」（生理用ナプキン無料提供サービス）の運用がスタートしました

2022年3月10日より、杉並キャンパス・相模原キャンパスの女性用個室トイレ・バリアフリートイレ（24個室）で生理用ナプキン無料提供サービス「OiTr（オイテル）」の運用を開始いたしました。「OiTr（オイテル）」は、個室トイレ内に設置されたディスペンサーにスマートフォンをかざすことで生理用ナプキンを無料で受け取ることができるサービスです。美術系大学としては全国で初めての導入となります。生理にともなうさまざまな負担の軽減と、ジェンダーギャップや「生理の貧困」といった社会問題を考えるきっかけのひとつとなるよう、ニケの会ご支援のもと、この度の導入に至りました。

04 | インドネシア大使館主催 文化体験イベント

12月11日に、インドネシア大使館大使公邸にてインドネシア文化体験が行われました。本イベントはインドネシア大使館から招待を受け、本学からは31名が参加しました。イベントの最初には、インドネシア大使夫妻とバンドン工科大学の先生方からのご挨拶と、大使館職員の方からインドネシアの観光情報や文化紹介が行われました。その後、インドネシアの楽器演奏や民族衣装の着付け、伝統舞踊など、様々なインドネシアの文化を体験しました。お昼にはナシゴレンやソト・アヤムなどのインドネシア料理がふるまわれ、実際に教わりながらナシゴレンを調理しました。学生たちは、積極的に質問しながら普段なかなか触れることのできない文化体験を通してインドネシアの魅力を存分に味わうことができました。

08 | 稲木吉一先生　最終講義「ファッション通信：仏像篇」

2021年度で本学を退職された稲木吉一先生の最終講義が、1月26日にオンラインにて行われました。稲木先生は1989年度より本学で教鞭をとられ、大学院美術研究科・芸術学部芸術文化専攻・共通専門教授として多くの学生を指導されました。最終講義のテーマは「ファッション通信：仏像篇」。似ているポーズや顔の著名人を見つけることで、身近な観点から楽しめる仏像鑑賞の方法や、仏像の変遷を辿りながら、作られた土地や人種、時代の流行が反映されていることを解説いただきました。スライドに登場した仏像が纏う衣装に表れるドレープを再現するために、モデルへ実際に着付けも行いました。最後には研究室や現地に駆けつけた卒業生から花束が贈呈され、オンラインで聴講された方々からもチャットでたくさんのメッセージやマイク越しに拍手が送られました。稲木先生、これまで本当にありがとうございました。

09 | 第19回 えどがわ伝統工芸 産学公プロジェクト

「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」は、江戸川区の伝統工芸者の技と美大生のデザインとのコラボレーションにより、現代のライフスタイルに合った伝統工芸製品を生み出すプロジェクトです。平成15年度から開始し、平成20年にはグッドデザイン賞を受賞したこの取り組みは今年で19回目を迎え、今回は伝統工芸者8名と本学学生26名により、27点の作品が発表されました。新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、顔合わせから商品完成までの工程を初めてオンライン上で行いましたが、学生たちは伝統工芸者との入念な打ち合わせのおかげで、自身のアイデアが具現化する貴重な体験ができました。「えどがわ賞（最優秀賞）」は熊木ちえさんがデザインした髪留め『uruwa』に、「教員賞（優秀賞）」は大島未鈴さんによるデザインのルームライト『咲灯り（SakuAkari）』と、伊藤由莉さんによるデザインのスマホスピーカー『土の音返しスピーカー』に贈られました。

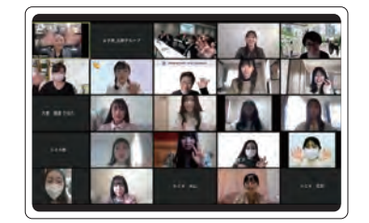
作品一覧

作品の一部は
左のQRコードより
購入できます

髪留め『uruwa』

ルームライト『咲灯り（SakuAkari）』

スマホスピーカー『土の音返しスピーカー』

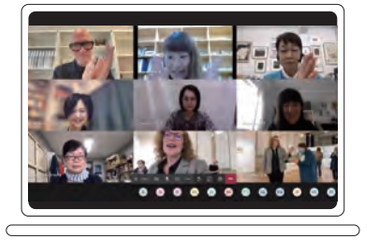


05 | ルミネ × 三女子大学連携 PBL（問題解決型）産学プロジェクトの最終報告会が行われました

2月3日、株式会社ルミネと三女子大学（大妻女子大学、実践女子大学、女子美術大学）連携による産学プロジェクトの最終報告会がオンラインで開催されました。本学から有志の3年生11名が参加し、総勢34名の学生で5つの混成チームを組み、「ファッションビジネスにおける『サステナブル』の在り方とは？それをルミネで具体的に実現するとしたら？」という課題に対して、マーケティングリサーチやミーティングを重ねました。普段“消費者”として接する商品やサービスを“提供者”の立場で考える機会となった本プロジェクト。参加学生にとっては、違う分野を学ぶ他大学の学生とどのようにコミュニケーションを図るか、その中で強みであるデザイン力をどのように発揮し提案を行うか、といった難しさを体感しつつも、実践的な力を身に付ける機会となりました。最終報告会では、総評としてルミネの社員の皆様から“学生ならではの視点・切り口による様々な提案があったので、今後内容を真剣に検討していきたい”というコメントを頂き、参加学生にとって非常に充実した取り組みになりました。

07 | フィリピンとの交流事業「PROJECT D I S PLACED 2021 –移し替える–」

女子美生とフィリピンの若手アーティストがオンラインで交流するプロジェクト「PROJECT D I S PLACED 2021 –移し替える–」が2021年9月30日から11月4日にかけて計7回行われました。本プロジェクトは、日本とフィリピンの若手アーティストが、両国の教育者やゲストスピーカーとのオンラインディスカッションを通して「コミュニティへのアーティストの役割とは何か」、そして「アーティストの活動にとってのコミュニティの役割とは何か」について考えることを目的に開催されました。各セッションでは、両国の参加者からのプレゼンテーションやそれぞれの制作現場やキャンバスの紹介、ワークショップを通した意見交換などを行いました。国外への移動が難しい状況が続いていますが、オンラインでつながることのできる状況をポジティブにとらえ、新しい国際交流の形を見出していく試みになりました。



06 | Island Nations－島国 女子美術大学 × バーミンガム・シティ大学 交流展覧会

本学の学術協定校であるイギリスのバーミンガム・シティ大学と本学教員による交流プロジェクトである展覧会の「Island Nations－島国」が、4月12日～4月22日の期間で、バーミンガム・シティ大学美術学部にて開催されました。本展覧会は、当初2020年7月に先にイギリスで行われる予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により延期され、2021年5月の本学相模原キャンパスでの展示と、2022年のバーミンガム・シティ大学美術学部での展示の計2回に分けて実施される運びとなりました。初日には、本展覧会のオープニングイベントが開催され、各大学のアーティストによる作品紹介が行われました。イベントは、会場からのライブ配信により日本とイギリスをつなぐオンライン形式で開催されました。

ORIHICA公式サイト
特集ページ

12 | 女子美術大学 × ORIHICA共同開発プロジェクト 男女兼用ビジカジシャツが発売中

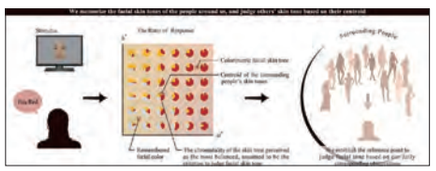
本学とビジネスファッションブランドのORIHICAとの共同開発プロジェクトにて完成した商品が、ORIHICAオンラインショップにて販売されています。本学ファッションテキスタイル表現領域の学生2名が、様々な変化を遂げている現代における次世代のビジネスカジュアルシャツをそれぞれデザインしました。日本の伝統文化を形にした「ORIKATA」、クラシックなスタイルを今の時代にあわせた「NEW NORMAL×CASUAL CLASSIC」、2つの商品がORIHICAオンラインショップにて販売中です。ORIHICA公式サイトの特集ページには、2商品のコンセプトや同領域教授の山村美紀先生・デザインを手がけた学生2名へのインタビューも掲載されておりますので、ぜひご覧ください。

13 | 坂田勝亮教授と 本学卒業生の共同研究

本学美術学科芸術文化専攻教授の坂田勝亮先生（色彩学）が本学卒業生と共同研究を行い、その成果が著名な学術誌に取り上げられました。

本学卒業生の 島倉瞳さん（（株）資生堂研究員）との共同研究

人は、周囲にいる同世代・同人種の顔の肌の色を無意識のうちに記憶しており、顔の肌の色を判断する際にこれらの平均値を基準としていることを明らかにしました。研究結果は著名なイギリスの学術誌「Vision Research」に掲載されました。



Color Criteria of Facial Skin Tone Judgment

本学卒業生の廖松陽さん、リバプール・ホープ大学（イギリス）の Paramei教授（心理学）との共同研究

SNSなどで使用される顔アイコンが表現する感情が色によって大きく影響を受けること、また文化により顔アイコンの表情や色の伝える内容や程度に差があることを明らかにしました。研究成果は世界的に有名なイギリスの学術誌「i-Perception」に掲載されたほか、多数のメディアに取り上げられました。

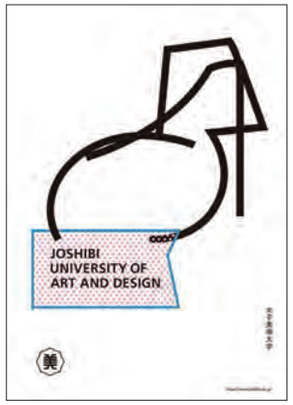
Color Affects Recognition of Emoticon Expressions

10 | 女子美術大学大学院・芸術学部・短期大学部 2021年度 学位・修了証書授与式　2022年度 入学式

杉並・相模原両キャンパスにて、2021年度学位・修了証書授与式（3月13日）、2022年度入学式（4月5日）がそれぞれ執り行われました。新型コロナウイルス感染症予防対策を講じ、各キャンパスの体育館にてそれぞれ実施。列席できない保護者の皆様に向けて、各式の模様をYouTubeにてライブ配信しました。2022年度、女子美は大学院美術研究科 71名、芸術学部 685名（編入含む）、短期大学部 226名（専攻科含む）、計982名の新入生を迎えることができました。

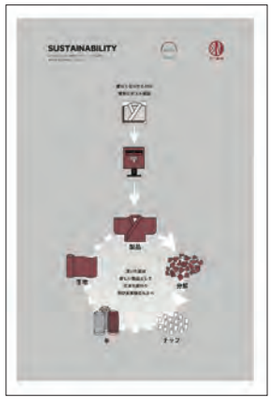
11 | 相模大野ステーションピアノ 装飾プロジェクト

3月9日～ 3月22日まで期間限定で設置された「相模大野ステーションピアノ」の周辺デザインを、本学デザイン・工芸学科環境デザイン専攻3年生の有志学生が手掛けました。「相模大野ステーションピアノ」とは、相模大野ステーションスクエア3階アトリウム広場に設置される桜の木とグランドピアノを一体化したアート作品です。希望者は設置されているピアノを演奏する事ができます。 今回のデザインは「Hop Step Jump」をテーマに、うさぎたちが新しく訪れる春を祝う準備をしている様子を表現しており、新しい出会いや目標に向かう、さまざまな方へ祝福やエールを贈るという想いが込められました。また、3月13日にはプロジェクトに参加した学生が、東日本大震災の復興支援ソングである「花は咲く」「メモリー」を演奏しました。



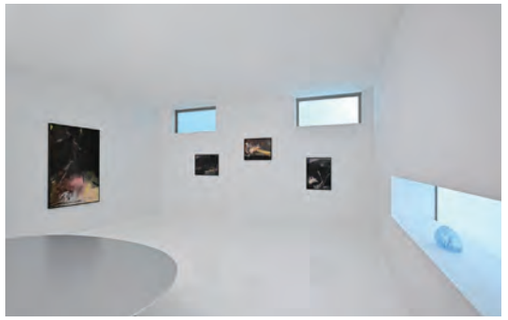
14 | 林規章教授デザインの本学ポスターが『東京TDC賞2022』『JAGDA賞2022』をW受賞

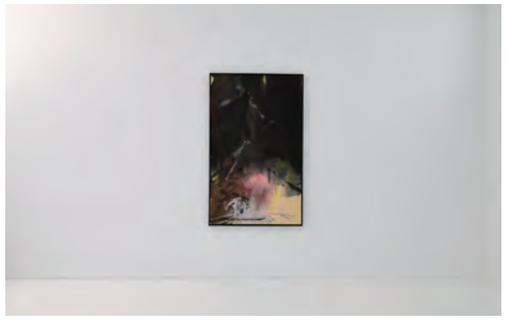
本学ヴィジュアルデザイン専攻教授の林規章先生が手掛けた、本学2021年度ヴィジュアルイメージポスターが、『東京TDC賞2022』『JAGDA賞2022』をそれぞれ受賞しました。また、毎年JAGDA賞の中から最も輝いている作品とその制作者に贈られる『第24回亀倉雄策賞』の最終選考上位3作品にも選ばれました。本ポスターは、全国の高等学校や美術系予備校に配付し掲示されているものです。

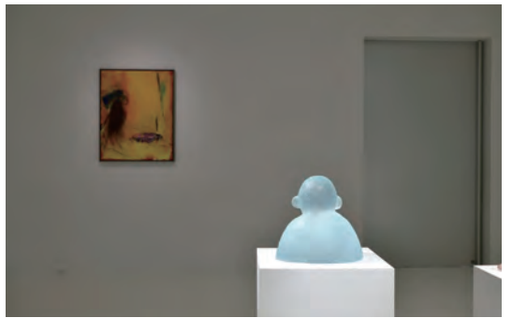


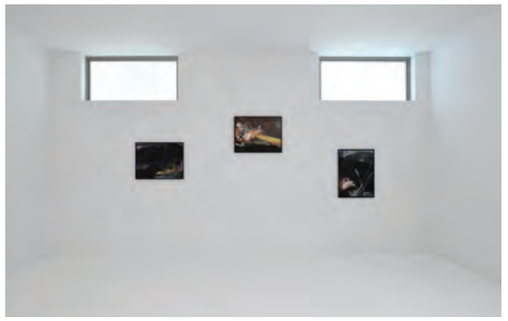
15 | 伊藤忠商事株式会社・繊維課 連携授業「ファッションと地球の共生を考える」の講評会が行われました

本学ファッションテキスタイル表現領域3年生が伊藤忠商事株式会社の「RENUプロジェクト」（女子美版）に参加し、ファッション産業が抱える大量廃棄問題を解決するための企画・制作を行いました。これからデザイナー・クリエイターとして社会に出ていく学生たちにとって環境に配慮したサステナブルな取り組みは必須となります。企業から現状を学び、消費行動についてのアンケートやリサーチを行い、モノづくりを通して作る責任について改めて考えること、そのアイデアのストーリーを構築し魅力的なモノとして伝える力、総合的なデザイン力を培うことを目的に実施した結果、ユニークな視点とアイデアをカタチにできる力を高く評価していただきました。









Copyright the artist, Courtesy of ShugoArts, Photo by Shigeo Muto

16 | 本学客員教授　イケムラレイコ先生　個展「限りなく透明な」

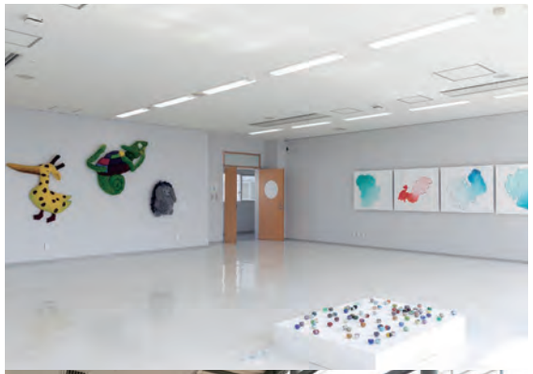
本学大学院客員教授であるイケムラレイコ先生の個展「限りなく透明な」が4月14日～ 5月28日に六本木のシュウゴアーツにて開催。今回の展覧会では 、6点のペインティングに加え、以前よりアトリエに設置している窯を使って制作されたガラス彫刻6点が披露されました。また、今回の個展や本学での指導について先生にお話を伺いました。その様子は、本学WEBサイトにて公開しておりますのでぜひご覧ください。

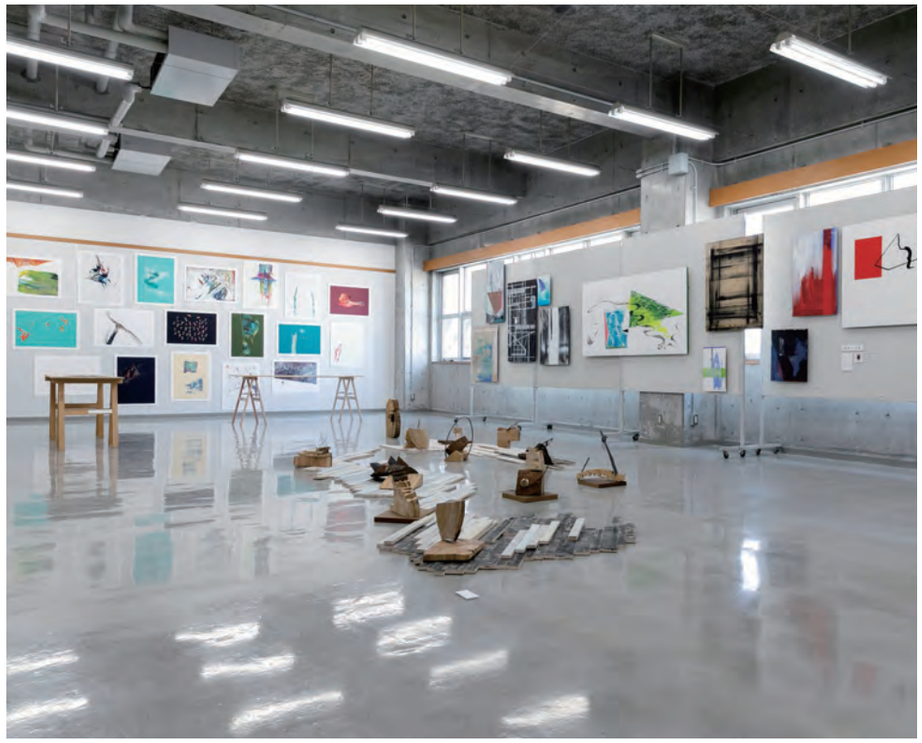
女子美術大学WEBサイト
教授インタビュー「きょーじゅ！」
大学院 美術研究科
イケムラレイコ客員教授

イケムラレイコ
三重県津市生まれ。1970年代にスペインに渡り、スイスを経て1980年代前半よりドイツを拠点に活動。絵画や彫刻、ドローイング、写真、詩といった多岐に渡る表現を駆使し、この世に存在するものの生成と変化の諸相、そこに潜む無限の可能性を表現するという根源的な芸術の課題に対峙した作品群は国内外から高い評価を受けている。1991年～2015年ベルリン芸術大学教授。2014年より本学大学院客員教授。2020年芸術選奨文部科学大臣受賞。

2021年度卒業制作展／修了制作展
来場型・オンライン型のハイブリット開催

本学大学院・芸術学部・短期大学部の2021年度卒業制作展／修了制作展が杉並と相模原の両キャンパスにて行われました。芸術学部と短期大学部は3月11日～13日、大学院の展示は3月9日～14日の期間で開催。また、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症予防対策として特設WEBサイト上でも作品をご覧いただくことができました。4年間、あるいは2年間の学生生活の集大成として、それぞれの想いが詰まった力作が多く展示されました。



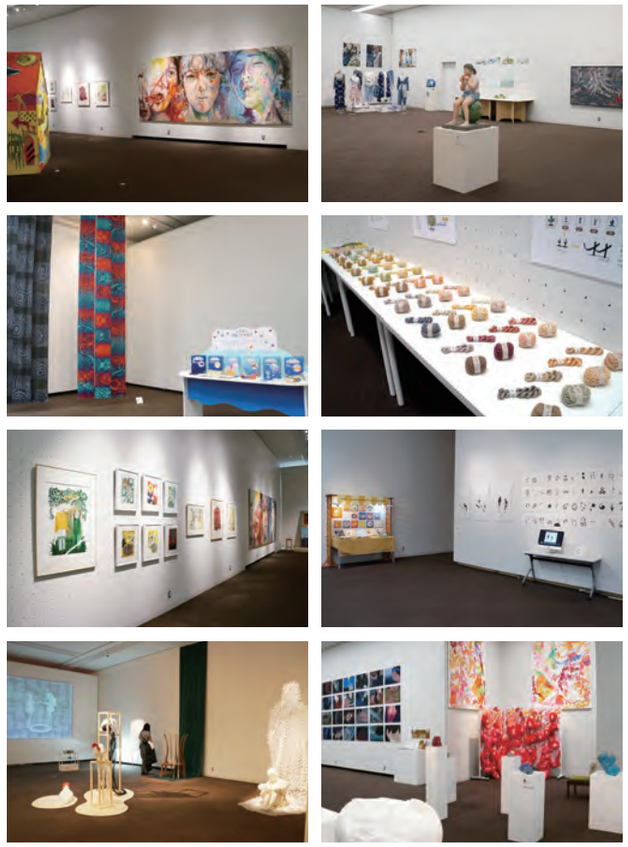


東京都美術館とオンラインにて開催、JOSHIBISION 2021

「JOSHIBISION 2021 ―アタシの明日―」が3月1日～5日まで東京都美術館にて開催されました。今年で6回目の開催となる「JOSHIBISION」。このタイトルはJOSHIBI×EXHIBITION×VISIONをつないだ造語です。「いまを生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。

『オール女子美』をスローガンの元、本学大学院・芸術学部・短期大学部の各研究室から選抜された作品、および付属高等学校の卒業制作を一同に展示。

また、新型コロナウイルス感染症の対策をふまえ、昨年度に引き続き会期中のみ観覧可能な特設WEBサイトが設けられ、来場型・オンライン型のハイブリット形式による開催となりました。



2021年度 学外卒業・修了制作展

1月から各学科・専攻・領域・コースごとに行われました、学外での卒業・修了制作展の様子をご紹介いたします。新型コロナウイルス感染予防対策を講じた上での実施となりましたが、学生生活の集大成である卒業・修了制作を見るために、在学生や保護者、卒業生などが会場を訪れました。

女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域 卒業・修了制作展「純な混沌」

会期：1月14日～1月26日
会場：女子美ガレリアニケ（東京都杉並区）

女子美術大学短期大学部 造形学科 デザインコース テキスタイルデザイン 卒業・修了制作学外展

会期：2月10日～2月13日
会場：AXIS Gallery（東京都港区）

細井彩花　葉園飛 – 女子美術大学大学院 版画研究領域 修了制作展 –

会期：1月31日～2月5日
会場：表参道画廊（東京都渋谷区）

女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻 卒業制作展2022「5senses」

会期：2月11日～2月15日
会場：Spiral Garden（東京都港区）

女子美術大学 芸術学部 美術学科 美術教育専攻 卒業制作展「。展」

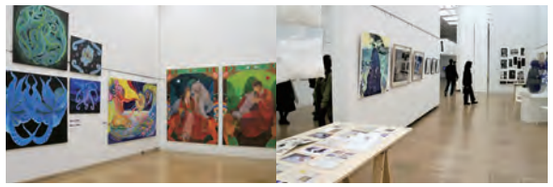
会期：2月4日～2月7日
会場：横浜市民ホール（神奈川県横浜市）

女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻 卒業・修了制作展2022

会期：2月19日～2月21日
会場：横浜赤レンガ倉庫（神奈川県横浜市）

令和3年度・第45回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展 開催

2月26日～3月5日の8日間に渡り、東京五美術大学（武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・女子美術大学）の美術系学科による卒業・修了制作展「東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」が国立新美術館にて開催されました。昨年に引き続きコロナ禍での実施となりましたが、出展関係者の行動管理、密の回避、消毒といった感染防止策を徹底して行われました。また今年は五美大展合同企画として、出品した学生たちが学生生活や制作について話し合う「座談会―学生たちがとことん話す、私たちのリアル―」や、各大学関係者が展示の見どころを紹介する「ぶらぶら五美大展」をオンラインで開催。今年も五美術大学の個性がつまった作品が一堂に会し、来場者を魅了しました。



女子美術大学美術館賞

修了制作及び卒業制作が優秀な学生に授与される女子美術大学美術館奨励賞受賞者の中から1名に「女子美術大学美術館賞」が授与され、賞状と副賞が贈られました。
また、選抜作品は女子美術大学美術館に収蔵されます。

『瞳は常に静観している Ⅱ』　石井杏奈
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻洋画研究領域

2021年度 特別賞

順天堂 佐藤志津・小川秀興賞

学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2016年度より優秀な卒業制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は順天堂大学内に1年間展示されます。

『呼吸』　渡邊真弥
芸術学部美術学科洋画専攻

『渺渺（ビョウビョウ）』　李 唯親
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学賞

学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年度より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

東京理科大学
学長賞

『報いの一日』　山﨑舞華
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学
坊っちゃん賞

『とまれ』　大石珠世
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

東京理科大学
マドンナ賞

『いつも』『帰り道』　向井奈苗
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

展覧会報告

JAM

2021年度 女子美術大学退職教員記念展
2022.1.12(水) – **1.28**(金)　渡邊三奈子・澁谷克彦展　2021年度退職される女子美術大学芸術学部教員の展覧会。

2021年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2022.3.9(水) – **3.14**(月)
2021年度に本学大学院美術研究科を修了する学生の修了制作作品の展覧会。相模原キャンパス（女子美アートミュージアム）では、洋画、日本画、版画、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、環境デザイン、プロダクトデザインの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。オンライン同時開催。

【学内展】女子美染織コレクションと女子美の先達たち展
2022.4.5(火) – **4.27**(水)
女子美染織コレクション（舞楽装束の装束2点、展示風景映像、過去の展覧会ポスター）女子美の先達たち（松本俊蕃、野見山暁治、入江一子、芹沢銈介、田村俊明、山野雅之、工藤直、野又穫、郷倉和子の作品）の展覧会を開催しました。

女子美ガレリアニケ

2021年度 女子美術大学退職教員記念展
2021.12.3(金) – **12.22**(水)
小林信恵展　2021年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会を開催しました。

2021年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2022.3.9(水) – **3.14**(月)
2021年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会。杉並キャンパス（女子美ガレリアニケ）ではメディア、ヒーリング、ファッションテキスタイル、アートプロデュースの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。オンライン同時開催。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2021 ー純な混沌ー
2022.1.14(金) – **1.26**(水)
アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・大学院による卒業・修了制作作品展を開催しました。

IOGI チェコ・コミックに描いた日本の日常
2022.4.1(金) – **4.27**(水)
チェコ国立西ボヘミア大学メディアイラスト学部で生まれた「IOGI」という杉並を題材に描き、コミックを制作する企画の抜粋作品と原画を紹介しました。

歴史資料展示室

2021年度収蔵資料展　収蔵資料にみる女子美の歩み
2021.4.7(水) – **2022.3.18**(金)　明治・大正・昭和期の本学学生作品や教材・道具などを紹介しました。

展覧会予告

JAM

女子美術大学美術館コレクション JAMのABC展 鑑賞のプラクティス
2022.5.18(水) – **7.2**(土)
アルファベットをきっかけに展示作品の見どころやヒント（問いかけ）など、提示した手がかりをたよりに様々な見方で鑑賞する展覧会です。

第42回　造形「さがみ風っ子展」
2022.10.21(金) – **10.23**(日)
相模原市教育委員会主催による市立小中学校の作品展示です。

2022年度 女子美術大学退職教員記念展
2023.1.11(水) – **1.26**(木)
2022年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2023.3.10(金) – **3.15**(水)　＊会期中無休
2022年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

柚木沙弥郎の100年ー創造の軌跡ー
2022.9.17(土) – **10.17**(月)　＊会期中無休
女子美術大学工芸科の草創期に尽力した柚木沙弥郎。教育者としての存在を作品とともに紹介し100年の軌跡に迫る展覧会です。

女子美染織コレクション展Part10 きものー江戸から明治の装いー
2022.11.9(水) – **12.10**(土)
江戸時代から明治時代のきものの着装に視点をあて、華やかな女性の装いを展覧します。

2022年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会
2023.2.13(月) – **2.18**(土)
※開催は学位の申請状況により変更があります。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#06東麻奈美 ポルターガイスト／回転
2022.5.17(火) – **6.20**(月)
本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、東麻奈美の作品をご紹介いたします。

女子美術大学美術館コレクション　ーアーティストの姿ー
2022.10.28(金) – **11.21**(月)
女子美術大学美術館コレクションから退職教員の作品を中心にご紹介いたします。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2022
2023.1.13(金) – **1.25**(水)
アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作の作品展示です。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2022」展
2022.7.8(金) – **7.25**(月)
短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の作品を展示します。

2022年度 女子美術大学退職教員記念展
2022.11.29(火) – **12.17**(土)
2022年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2023.3.10(金) – **3.15**(水)　＊会期中無休
2022年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

歴史資料展示室

菊坂の女子美 ー戦災により焼失した本郷菊坂町校舎の時代をふりかえるー
2022.4.5(火) – **7.16**(土)　＊休室日　火・日・祝日
明治末期から戦中期に本郷菊坂にあった菊坂校舎の関係資料を紹介し、その時代をふりかえる企画展。

展覧会報告　PICK UP

2021年度 女子美術大学退職教員記念展

2021.12.3(金) – **12.22**(水)
杉並　女子美ガレリアニケ

2022.1.12(水) – **1.28**(金)
相模原　女子美アートミュージアム

2021年度 女子美術大学退職教員記念展では、本学短期大学部造形学科デザインコース教授の小林信恵先生、芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻教授の澁谷克彦先生と、同学科工芸専攻 テキスタイルコース教授の渡邊美奈子先生の作品展覧会を、各担当校地にて開催しました。

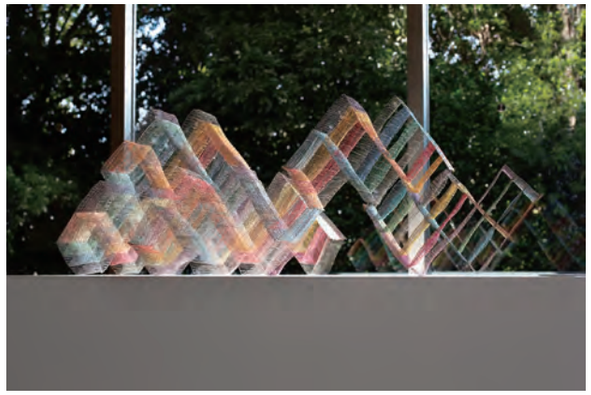
女子美ガレリアニケでは、小林信恵先生のオプティカルな表現と多彩な色使いで制作された作品の数々をご紹介しました。鮮やかで暖かな色彩表現は、鑑賞者の心に寄り添い五感を感じることを大切に制作された先生の思いが伝わる展示となりました。

女子美アートミュージアムでは、2名の先生方の作品を展示しました。澁谷克彦先生はアートディレクターを務められた『花椿』から新作まで、さらには映像作品を音楽とともに鑑賞する「花椿アワー」など多様な作品群が並びました。あそび心をおとしこむ演出が随所にちりばめられ、見せ方次第で作品の表情が異なることを展示を通して示唆するものとなりました。渡邊三奈子先生の透明性のつらなりで空間を構築する繊細かつ緻密な作品は、展示環境により作品の表情が異なります。その特異性を際立たせるために、ロビーと展示室の両方で展示を構成し、時間とともに揺らぎ変化する鑑賞方法を提示されました。

長きにわたり教鞭をとり、後進の育成に携わるとともに、作家として創作活動に取り組んできた3名の先生方の幅広い活動の軌跡をご覧いただくことにより、本学の教育方針への理解がより一層深まる機会となりました。

小林信恵先生　会場風景　撮影：玉井幹郎

澁谷克彦先生　会場風景　撮影：末正真礼生


渡邊三奈子先生　作品「Shower of Lights（光の雨）」　撮影：末正真礼生

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　佐藤真澄・松山智一
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社ヒーローズ
発 行 日　2022年6月21日

© 2022 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL https://www.joshibi.ac.jp